切支丹の里

遠藤周作

切支丹の里

遠藤周作

人文書院

切支丹の里©

著者　遠藤周作

昭和四十六年一月二十日初版発行
昭和四十六年六月十五日重版発行

発行者　渡辺睦久

発行所　株式会社人文書院
京都市下京区仏光寺通高倉西
振替京都一一〇三　電話三三一三九一

本文印刷　内外印刷株式会社
写真印刷　日本写真印刷株式会社
製本　坂井製本所

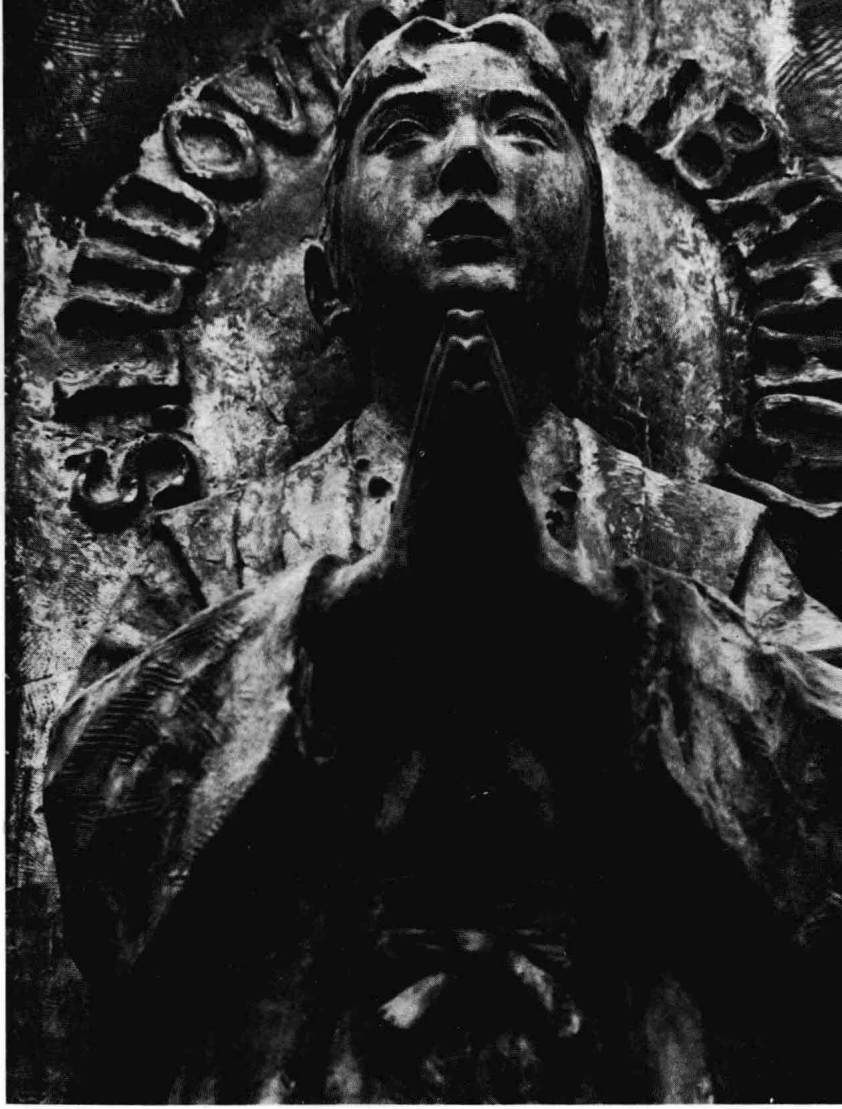
定価六八〇円

(分)0095(製)100014(出)3266

風頭山より眺める長崎全景。

前頁　大浦天主堂横の坂道。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



西坂の二十六聖人像。

一枚の踏絵から　9
日記（フェレイラの影を求めて）　53
横瀬浦、島原、口ノ津　69
有馬、日之枝城　85
雲仙　101
弱者の救い　――かくれ切支丹の村々――　125
父の宗教・母の宗教　――マリア観音について――　153
母なるもの　169

写真（23葉）＝斎藤康一　99　100　5～8　121～124　51　52　151　152　65～68　167　168

泉　秀樹　81～84

地図＝長崎県全図　215　長崎市街図　216

ケース図版＝十六番館の踏絵より

扉図版＝南蛮地図

切支丹の里

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

一枚の踏絵から

一

はじめて長崎の街に行ったのは格別な理由があってではなかった。もともと見知らぬ街をふらりと訪れるのが好きだったから、仕事の暇があれば汽車に乗って、あてもなく、偶然、停った駅でおりるということも度々あったのである。

九州の街は熊本や鹿児島や福岡ならばかなり知っていた。いずれもその街を背景にした作品を書いていたためである。勿論、私は九州の出身ではなかったが、自分がえらんだ題材に適した背景が偶然、これらの街だったのだ。

だが長崎の街をその時たずねたのはそういう仕事のためではなかった、当時、私はこの街の歴史についてほとんど何も知らなかったし、切支丹時代について特に勉強したわけではなかったの

だ。

だが見知らぬ街を訪れるというのは、ちょうど新しい本の最初の頁を開くのとよく似ている。本屋に入って書棚にずらりと並んだ本の一冊をぬきとり、頁の匂いをかぎ、走り読みをする。小説家である私には、私なりに本にたいする妙な直感があって、最初の頁や目次を見ただけで、この本がやがて自分にとって話しかけてくる本か、それとも一向に興味をひき起さぬ作品かが、大体わかるのである。

そしてそうした予想を抱いて買った本を我が家に持ってかえり、あらためて読む時、今まで知らなかった世界、今まで知らなかったものが突然、眼の前にひろがってくる。好奇心は疼き、その好奇心が頁をめくるたびに興味をふかめてくれる。

長崎の街は私にとって、まさしく、そんな都市だった。

はじめて長崎に行ったのはもう七、八年前の初夏だった。大村から長崎に行く道の両側に花の散ったあとの桜の若葉が茂り、楠の葉が光のなかでかがやいていた。私は友人から教えられた風頭山の頂上にある矢太楼という宿屋に泊り、眼下にひろがる午後の長崎の街とその周りの山々や、それから両手でかこまれたような長崎湾やその湾に浮かぶ船をぼんやり眺めた。

はじめての街がいつもそうであるように、宿の人から、あれが出島、あれが大浦の天主堂と指さされても、その歴史も背景もそれほど勉強したことのない私はただ、そうですかとうなずくだ

けで、特にこの街が自分の心に食いこんできたわけでもなかった。それらの場所も私にとっては、たんなる名所旧跡以上の範囲を出なかったのである。

ただ、なぜか知らぬが、この街とそれをとりかこむ眠いような空気の奥に、私の興味をひく何かがあった。その何かは勿論、自分でも名をつけることはできなかったが、本棚のなかから、未知の一冊の本を選び出した時の感じに似たものが胸の底から湧いてきた。

一冊の本を開いて、それが自分を惹きつけるか否かは、走り読みをしながら偶然、ぶつかった言葉や文字のせいである場合がままある。その言葉使い一つで、著者の発想法がおぼろげながら摑めるのである。

たった一つの言葉、偶然に眼にふれた一つの文字——もし長崎を本にたとえるならば、私にはその夕暮、眼にとまったものがそうだったのである。それは踏絵だった。偶然みた踏絵だった。

さて、その夕暮、何もすることがなかったからタクシーを頼んで街のなかを一通り見物することにした。矢太楼のフロントの話によると長崎のタクシーには私のような客のためにガイドをつけてくれるという話である。

私はお上りさんよろしく、その若い娘さんのガイドの乗ったタクシーに乗り、宿屋でもらった長崎の地図を膝の上にひろげて、街のなかをぐるぐると回った。眼鏡橋だの、思案橋だの、出島

だの、平和公園だの、それからグラバー邸だの、それらは長崎を見物する人が必ず、まず訪れる場所なのだろう。十八、九の娘さんは暗記した通り、手ぶりを入れ、時には歌まで歌ってくれた。だが彼女の折角の努力にかかわらず、私は、急に一人になりたくなってきた。

大浦の天主堂の前まで来た時、もう夕暮だというのに、まだ沢山の観光バスがとまり修学旅行らしい高校生たちが騒ぎながら階段を登ったり、おりたりしていた。新婚旅行の若い夫婦があっち、こっちで写真を撮りあっている。

「さあ、おりましょう」

とガイドの娘さんは私を促した。

「いや、もういいよ」

私は首をふり、怪訝な顔をしている彼女に

「ここで帰ってください」

と言った。

「少し、ぶらぶらします」

「見物ばされんとですか」

「こう沢山の学生さんがいちゃあね」

「ほんと。いつも、そうです」

私は車を帰して、一人で歩きはじめた。何処にいく目当もなかった。芋を洗うように沢山の高校生のいる大浦天主堂を見物する気持もなかった。

私は教会の左側にそった坂道をのぼった。そこには人影がなかったからにすぎない。大きな楠があり、石段は少し急だったが、あたりは、静寂で、さっきの喧騒が嘘のようだった。

ふりかえると、そこから港と船と湾とが一望できた。私は石段に腰をおろし、そこから湾を眺めた。

この大浦天主堂の左の坂道はその後、長崎に行くたびに私の欠かすことのできぬ散歩道となった。朝、早くここを歩き、夕暮、ここを歩き、いつもそこは静寂で誰からも邪魔されることなく、長崎湾をみることができた。

私は階段をのぼって、右の方向に歩いた。いつの間にか道はとぎれ、すぐそこに十六番館と書いた建物があった。そこにも女子高校生たちが十人ほど立っていたが、大浦天主堂ほどではない。

「何があるの。ここは」

と私がたずねると

「明治の頃の外人が使っていた家具やお皿なんか、並べているんです」

と一人が教えてくれた。

「面白い？」

「いいえ」

彼女は首をふって白い歯を見せて、はにかみ笑いをした。

私だって、そんな明治初期に長崎に居留した外人たちの古家具や食器を見たいとは一向に思わなかった。だが天主堂のほうに戻る気がなかったから、そこで少しだけ時間をつぶそうと思ったのである。

十六番館はいかにも明治時代の木造西洋館という建物だった。そしてこのあたりにはむかしの神戸や横浜と同じようにペンキ塗りのそうした洋館や、少し黒ずんだ赤煉瓦の建物がいくつも残っているらしかった。

考えていた通り、中はつまらなかった。それほど良くもない古家具や食器を大事そうに並べた間を、私は通りぬけ、あくびをしながら外に出ようとして、ふと、出口にちかい一室で、何か黒い四角いものが硝子ケースのなかに置かれているのが眼にとまった。

踏絵である。ピエタ——つまり十字架からおろされた基督の体を膝にだきかかえるようにした歎きの聖母像を銅版にして、それを木のなかにはめこんだ踏絵である。

もちろん私はそれまで幾度か踏絵を見たことがあったから、この時が最初ではない。しかしこの夕暮の高校生たちが右往左往している薄暗い館内でしばらく、じっと立っていたのは、踏絵自体のためではなく、それを囲んでいる木に、黒い足指の痕らしいものがあったためであった。足

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com